折口信夫対話 I

古典と現代

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄＋角川源義

折口学入門——
ナマの発想に接しうる初の対話集！

折口信夫の名は、その学問内容の何たるかを越えて、今や、広く一般に知られるようになった。
しかし、その知名度に比して、折口学への一般人の理解は、きわめて稀薄であるといって過言ではあるまい。
それには文体の特異性にも一因があろう。だが何よりも、この学問の広さと深さが独特の難解さをもたらしているところにある。
その意味で、ナマの言葉に直接触れうる本対話集は、書かれた著作では窺いえない貴重な示唆を放っているといえよう。
文学論「古典と現代」にとどまらず、独創性に満ちた折口学の発想基盤とその魅力を知る上で、本書のもつ意義は大きい。

角川選書——67

角川選書——67

折口信夫対話1—古典と現代

昭和五十年一月三十日　初版発行

編者—池田弥三郎＋
岡野弘彦＋
加藤守雄＋
角川源義

©Shinobu Orikuchi etc.

Printed in Japan

発行者—角川源義　発行所—株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—三—三　郵便番号一〇二
電話東京〇三—二六五—七二一(大代表)　振替東京一五三〇八
装幀者—杉浦康平　協力—鈴木一誌＋杉浦富美子
印刷所—新興印刷株式会社　外装印刷—旭印刷株式会社
製本所—株式会社宮田製本所
定価はカバーに明記してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
0395-703067-0946(0)

折口信夫対話 I

古典と現代

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄＋角川源義

角川選書 67

*

折口信夫対話1

——古典と現代——

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄＋角川源義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

*

目次

古代の旅びと——北原白秋 七

万葉と現代——石原純・大橋松平・北原白秋・斎藤茂吉・土岐善麿・前田夕暮・山本実彦・李光洙 一七

女歌について——阿部静枝・今井邦子・大橋松平・岡本かの子・杉浦翠子・水町京子・山本実彦・若山喜志子 二三

古典と現代——土岐善麿・長谷川如是閑 三

国文学と現代文学——青野季吉・舟橋聖一・堀辰雄　二二九
日本の古典——長谷川如是閑　二六一
王朝——室生犀星　二〇七
日本文学の歴史——岡不可止・中谷孝雄・林房雄・藤田徳太郎　二一九
『古代研究』の思想と文学——風巻景次郎・高崎正秀・西角井正慶・森本治吉　二五一
現代文学の諸問題——菊池武一　二八三

解説――――――――――池田弥三郎――二九九
あとがき――――――――――角川源義――三〇七

〔注：座談者名は、五十音順〕

古代の旅びと

——北原白秋

折口　近ごろ見た本のうちでは『奄美大島民族誌』という本が、ためになりました。茂野（幽考）君という人は非常にまじめな、青年らしい感激を持って、自分の祖先たちの生活を見ています。ただ残念なことには、茂野君自身が作って、自分が譜までつけて巻頭に出している歌を見て、やや寂しく感じました。茂野君よりも、もっと教養のない、もっと貧しい、もっと感激を表わすことを知らない、あの島の幾代の詩人が歌い残した歌が、現在この本に載っているのと、自然くらべ合わされて寂しい気がしたのです。たとえば、一度飢饉があると一村が死に絶えてしまうというような、昔の甘藷すらも植えられなかった時代のあわれな面影が、十分に、どの歌にも宿っています。ことに、あの苺山に苺とりに上って、仆れ死んだ人々の幽霊が歌うていると伝える、山奥の歌などは、われわれの長く、それでもゆたかな山の生活をつづけて来たものには、たまらないほど怯えを感じさせます。「苺山のぼて」の歌などは、悲しんでくれといわないだけに、人を深く悲しませます。南の島々を歩くと、ことに、飢饉の話がたくさんあって、われわれの近代の祖先が呪うた、水呑百姓の生活などを、むしろ感謝しても足りないほどのものだという気がします。

旧日本の国々では、行人の行き仆れを伝える話や、またそのあとがたくさんあります。到るところの山村を歩くと、峠ごとに、こんな旅死の死骸をうずめた跡があります。そして、そこを通る村人のせめてはの心尽しから、道ばたの花や柴を、折りかけて通ります。近世では、すっかり忘れられていますが、昔はこうしたところにも、「苺山のぼて」の歌の類が伝わって、村の生活を哀れにしておったことと思います。こんなところを通ると、われわれでも、自然に柴を折ってやらなければすまない気が起こるのです。

この夏は、土佐と伊予の国境を歩きました。そして、たくさんの顔のくずれかかった、あるいは、

まだ血色のいい若者が、ほんとうにほっつりほっつりと一人ずつ来るのに行き会いました。こんなのは、死ぬまで家にかえらないので、行き仆れるまでの旅行をつづけているのです。私は、この旅行中に、東京の古泉（千樫）さんを死なせましたので、気持が恥ずかしいほど感傷的になっておりましたのです。芥川龍之介さんが、あんなに死にたいならば、あんなに死に栄えのする道を選ばなかったらよかったと思います。世の中には死にたくっても、それをもって死んだ、と思われることの堪えがたさに生きているものが、たくさんあるのです。私らも死にたさが切に起こったら、こうした行人順礼のような病気持ではありませんけれども、死に栄えのない、そしていつまでも敬虔な心の村人が、ただそれだけによって、好意を見せてくれる、柴折塚の主となる気になりそうに思います。これは、芥川さんほど血気が盛んでないせいでしょうか。でも、芥川さんに「苺山のぼて」の歌を聞かせてほしかったと思います。

白秋　九州の順礼は、もっと明るいようですね。私の国の部落では、町の娘たちが、年ごろになると、一度は必ず、順礼の団体に加わって、西国三十三か所をまわることになっております。つまり嫁入り順礼で、一度順礼に出ないと嫁入りの資格がないくらいに思われているので、たいがいの町家の娘は、一度は御詠歌を流して歩くものです。先達は町のお婆さん連ですが、娘たちはうきうきとなって、ただもう小鳥のように、一週間か十日をとびまわって帰って来るのです。また、至る所の村々では、それぞれにその村の旧家で、大いに歓迎して、泊めてくれることになっているそうです。村の若衆なども集まって来て、時とすると、そこに恋物語でも生まれそうな舞台面も開かれるので、それがまた、楽しみに出かける娘たちもあるように聞いております。その娘の順礼は、みな綺麗に白粉をつけて盛装した上に、新しい白い笈摺に、菅笠をかぶって、まるでお芝居にでも出る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ような足どりで、それに、片手に杖、片手に鈴をりんとふります。むろん手甲、脚絆、わらじです。旅に出るのは旧暦の三、四月、筑紫の平野に菜の花が黄色く咲き匂って、そのところどころの麦畑や、丘の裾などに、まるい莚の天井張りの、旅役者の芝居などがかかるころで、あたりがいかにものどかで、明るい季節の中なのです。それで順礼というと、私はきっとそうした美しい恋の順礼を思い出すので、寂しい消えも入るような姿の娘は、どうしてもしっくりと頭にこないのです。それで、おもしろい話になるのだが、ご存知かも知れないが、いつか小説で「よぼよぼ順礼」というのを書いたことがありますが、あの時は、驚いたというよりも、まったく僻易してしまって、何度か途中から逃げかえろうと思ったか知れません。はじめからお話しなければわからないが、大正の八年頃だと思います。小田原の伝肇寺に間借りしていた時のことですが、そこのお和尚さんの先達で、足柄下郡は小田原、箱根、根府川あたりのお婆さん連、四十名ばかりが相模八番を順礼してまわろうというので、私もすすめられたのだが、その婆さん達の髪の毛の臭いこと、臭いこと。なんでも若いのが五十で、年取ったのが八十いくつというのだし、中には白髪染めまでくろぐろとつけてはいるし、山坂へかかるころなどは、赤い長襦袢の片肌をぬいで、「さあさあ先生道行しましょう」などと手を握るので、どうにも驚いてしまったものです。

折口　白秋好みの「岸姫」のおそよや、自雷也の綱手姫のようなのでなくってお気の毒です。

白秋　え、どうも、目っかちのおひりっぴゃ按摩の婆や、出歯の豚やの古婆だから弱りましたよ。そいつらが畑へかかると、畑へ出ている若衆たちを、あらゆるみだらなことばでからかうし、山へ入ると、先生これをちょっと預かっておくんななどといって、きたない手提げや、風呂敷を「ぼくに持たして、さて一列になって、向うの道ばたにしゃがんでしまうのだからね。ぼくは目のやりばが

なくって、しかたがないから、空のお星様をながめていましたよ。宿屋へつけば皆盛んな芸づくしです。またその楽しみばかりで出て来るんですからね。お面や赤手拭や、長襦袢やを、ちゃんと用意して出て来たものです。かと思うと、お茶屋などに休んで、さて一銭ずつお出しなさいとなると、わしははあ食べなかったので、御免下せえまし、お隣りのお六婆などは二人前も食べたから二人前出すがええ、とか、どうにも欲張りの吝嗇なのには困りましたですが、そのお婆さん達の大部分は、震災で根府川の山海嘯のために生き埋めになってしまったので、私の順礼行も今は寂しい思い出となってしまいました。あの婆さんたちは、とにかく縦横奔放で、順礼に出る時だけが、ほんとうの童心に帰るというようなふうに見えました。なにより楽しみだったのでしょう。

折口　そうそう、同じことが、大阪辺にもありましたよ。尼講の人たちが、善光寺参りだの、あるいは、明治以後始まった、高野登りなどに、出かけて、そんな楽しみをつくして来たようです。だが、そのうちに忘れなかったのは、必ず、若い嫁入り前の娘を、連れて行ったことです。

これが、ちょうどあなたの方の娘順礼と同じ意味のものでしょう。

もっとも、四国辺でも、春ごとには国内だけは娘順礼がまわっています。そうしなければ、やはり、嫁入り資格ができないのです。今は、それだけのことですが、古くは、これが、成女戒の一つであったものと思われます。

男で見ますと、伊勢参宮、熊野参詣などいう、聖地順拝の群旅の形をとっています。その非常に古い形は、大峯山に登る御嶽精進なのでした。この山ごもりのあいだに、成年戒を受けて来る意味が含まれていたのです。このことは、あるいは、別に、今月号（「日光」五巻二号、「古代民謡の研究」(一)）にかくかも知れません。

もっと古くは、村から飛びぬけて、遠くない、かなり深い山に、山ごもりして、かなりながい禁欲生活の後、成年戒を授かっていたものと思われます。だから、この方面の順礼は、華やかであり、一方の順礼は、めいるような感じが、伴うて来るのです。

順礼にはすまないけれども、あの仲間の生活には、早くから乞食の方面が、伴うていました。今ならば、西田天香さんのような生活ですね。

奈良朝に行基門徒に限って、乞食行願を許されましてそれ以前からある宗教的旅行者はすべて、乞食者とみなされることになったのです。その以前の乞食者は、実は字義通りのこじきではありませんでした。

後世こそ、ほかいびと・ほいと、というても、こじきの意味ですが、古くは正確には、祝福言を唱える人が、ほかいびと、あるいは、ほきびとだったのです。

今も全国的に行われている、こじきの老朽語ほいとは仏語の陪堂ではなかったのです。

こうして見ますと、順礼にも、三種の旅行団がまじっていたことが考えられて来るわけです。

そうしたほかいびとは、神の語と動作を、演劇的に伝えておりました。そして、行くさきざきの家々を、祝福して歩いたのです。後世の門付け芸人などの出所はこれです。

「日日新聞」の新八景にはいった、室戸岬に行って驚きました。土佐の人は、その景色に対する感想をききたがっていられましたが、私は景色には驚きませんでした。しかし室戸岬にいる、えびすまわしという、ほかいのあとの、こじきとも、ある部落ともつかぬ待遇を受けている人の住居を見て驚きもし、感心もしたことを答えました。

これは全く、反語ではなかったのです。えびす神の人形も、今は売り払ったそうですが、近年ま

で、漁村、農村をまわして歩いたのです。これらが、日本の人形芝居の、ごく古い形を残しているものです。

今日の、文楽の人形なども、こうした海村の民の伝えた、偶人の演劇から出たものなのです。

それにおもしろいことには、今たった一軒残っている、えびすまわしの家が、岩浜の松の木立の中に真の意味の伏せ屋でいながら、住宅と、物置きとを、別棟に立て、一坪程ながら、畑も作っていることでした。しかも、おもしろいことには、その岩と岩とのあいだに、ほんの猫の額ほどの、空き間を見つけて、なんですか、うばべのような木を植えていたことです。「ここは何」と、すっぱだかで遊んでいた子供にたずねると、前栽と答えたことでした。

室戸岬はすみました。こんどは木曾川に移りましょう。

白秋　木曾川の笠松でききました話ですがね。その川岸に、なんでもすばらしい男根の形した陽石ですね。それをいつのころからか祭ってあるのですが、少しでもこれをよごした者は、たちどころに、神罰を受けるという話で、それを聞いてある毛唐の技師が、そんな馬鹿はないというので、あろうことか、赤いペンキでべたべたと塗りたくったんです。すると、その晩から大熱を出して極端に局部がうずいて、どうしても震えがとまらない。それで医者に見せても、とんと病源がわからない。するうちに、赤ペンキのいたずらは、毛唐だろうということになって、騒がれると、当人も青くなって、さっそく出かけて行って、水でペンキを洗い落としたというのですが、それで、瘧がけろりと癒ったというのです。今でもまだ、ペンキの跡が残っているといいました。私は、つい見損ないましたがこの次は、陰陽石のお話でもしていただきましょう。

私の小さいころには、傀儡まわしがよく来たものでした。昨年の秋、谷中の五重の塔の下で、そ

ういうのが、見すぼらしい人形を使っていましたが、あまり今日では見かけないようですね。私の方の門付けは、おおかた琵琶弾き坊主で、琵琶の形も古風な、胴の厚い、白木の、ちょっとマンドリン風のものですが、その歌調は、みふし、多くは滑稽物で、主として、方言を自由に使ったものでした、時には長い段物なども語りましたが、薩摩琵琶とか筑前琵琶とかいうものでなく、ずっと古い調子の純朴なもののように思いました。

多くは盲目で、まずは乞食でしょうが、秋のころになると、渡り鳥のように群れて来たものです。それらが、櫨の実の黄色に明った遊廓地などへはいり込んで、ちょうど、吉原の新内の流しのように、お茶屋の暖簾の前などを、ぺこぺこと撥の音を立てて、流して来たものでした。

室住の琵琶法師のあるものは、祈禱をしたり、占いをしたり、相当な信仰を得ているものもおりました。長崎あたりでは、神事にまでも携わっていたようです。

私の父は、非常に迷信が深かったので、そういう琵琶法師やお婆さんの巫女などが、ほとんど入り浸りになっていまして、酒が腐れたといっては御祈禱し、だれかが病気だと言っては、天狗使いなどを呼び寄せたものでした。

なんでも、菜の花の多い所で、あたりがきわめて明るいものだから、狐にはよくばかされるし、（一体暖国なものだから、柳河のおばけはしごく陽気です。）狐使いなども、よくはばをきかしたものでした。

それから、私の家に、三太郎さんという狐がいましてね、三年に一度位、二、三週間ずつ、久留米へ修行に出かけたものです。それは、爺やなどからよくきいてもいましたし、信じてもいたものです。その三太郎さんの御堂は、裏の泉水の傍の築山の陰に小さい祠があって、そこで私達は毎年

初午祭をしたものです。

私は、小さなときはよくどもったので、乳母に連れられて、寒々とした薄の土手や、枝垂れ柳の枯れつくした掘割りの円い土橋（一厘のおあしを取るので、俗によく一厘橋といったものです。水郷なので、そういうのがいたる所にあったものです。）を越えて、狐の舌を買いに行ったことなどがありました。

その狐の舌を私はよく食べさせられたものです。ある日などは、酒見という所の琵琶法師が来て、お前のできない学問をじょうずになるよう、お祈りしてあげるから、そのできない学問の名と、お前の名とを木の札にかけ、というので、「算術」とかいて、下に北原隆吉とかいて、おそるおそるその爺に預けたものです。今でも郷里のどこかの祠に、そういう札があげられているかと思うと恐縮しますよ。それからその爺はまた、ある日私を表へ連れ出して、お前の町の家相を見てやるから手帖を持ってついて来い、というので、おどおどしながら、後からついて行くと、すぐに隣りの家から始めるのです。

その屋根には草がぼうぼうとはえていました。「うん、この家は、もう三年の寿命だ。うん、誰か大病するな。そうお書き。」と、またつぎへ移ると、屋根を見上げ見上げ、「うん、こいつは、あと三年だ。いや、こいつは五年だ。いや、こいつは来年の冬は火事で焼けるよ。うん、こいつにゃ悪い主がついている。御祈禱せんけりゃならん。うん、あの家も駄目だよ、もう二年の内だ。みんな書きつけたかね。」そうするうちに、町中ひとまわりしてしまって、どの家もすべてが、凶相が出ていて、その琵琶法師の言いなり通りになったらすっかり全滅なので、どんな天変地異が起こるか、なんでも屋根も庇も、なまこ壁も、酒樽も醤油樽も、こんにゃく玉も、みんなぐらぐらして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.